

# I. 実態把握

## 手厚い支援を必要としている子どもの実態把握

手厚い支援が必要な子どもは、比較的重い障害がある子どもであり、その実態把握に難しさを感じている教員は少なくありません。それには、障害の状態が多岐にわたっていることから多角的な視点で実態把握を行っていく必要があること、子どもからの反応や変化が読み取りづらいこと、標準化した検査を用いることが困難なこと等、様々な理由が挙げられるでしょう。

この情報パッケージ「ぱれっと」の基本的な考え方では、手厚い支援が必要な子どもを、「家庭・学校・地域において、環境との相互作用の中で学び生活する学習者であり生活者である」という視点でとらえています。そのため、この実態把握の章においては、「子どものより主体的で豊かな学びや生活」をめざして情報を収集するための視点を中心に提案しています。

ここではまず、手厚い支援が必要な、重い障害がある子どもの実態把握の領域と実態把握の方法を簡単に紹介し、その後、ぱれっとの基本的な考え方に基づいた実態把握の視点を紹介します。

### 1. 手厚い支援が必要な子どもの実態把握の領域

#### ①医学的診断・所見と生育歴

まず、医学的診断や所見、及び生育歴について、できるだけ正確な情報を知ることが必要です。例えば、病名がわかることによって、教育的なかわり方についての手がかりを得たり、今後どのような留意点がでてくるかを予測し、その準備をしたりすることができます。また、医学的な情報は、知的機能や感覚機能のアセスメントにあたっても有用な情報になり

ます。これまでの治療や療育の経過を知っておくことも大切です。さらに、現在のかかりつけの病院など、連携が必要な機関等についても把握しておきましょう。

## ②実態把握の領域

手厚い支援が必要な子どもは、比較的重い障害がある子どもです。子どもの状態に応じて、様々な領域において細やかな実態把握を行う必要があります。呼吸や生活リズム、発作の状況などの健康面の領域、姿勢や粗大運動に関する領域、触覚・視覚・聴覚などの感覚に関する領域、手指の微細運動を含む知覚運動協応に関する領域、理解・認知の領域、対人関係・情緒・コミュニケーションに関する領域等です。加えて、摂食の機能等の特定の領域について、より細やかな評価が必要となる場合もあります。必要に応じて他の専門家と連携しましょう。

## 2. 実態把握の方法

### ①発達検査等の活用

標準化された発達検査等を用いると、発達のキーポイントとなる行動を概括的に把握することが可能になります。また、発達の現況と、今まさに育ちつつある予測的な発達状態をとらえることができます。反面、多くの検査は障害のない子どもの発達の順序性が基になっているため、重い障害のある子どもに適用する場合、これらの順序性や項目が、必ずしも子どもの発達に即応していないこともあります。発達過程のたどり方の個人差が大きいことを念頭に置かなければなりません。それぞれの検査の特徴を理解し、調べたい目的と子どもの実態に見合った検査を選択したうえで、適切な実施と結果の解釈を行う必要があります。

### ②行動観察・聞き取りによる方法

遊びや食事などの生活場面の子どもの行動の観察を通して、子どもの発達状況や獲得している行動の状況を把握します。自由な活動場面における様子を観察する方法もあれば、一定の条件下における様子を観察する方法もあります。感覚の使い方、人・物等の環境へのかか

わり方、コミュニケーション等、観察する観点を明確にしたり、チェック票を用意したりすることが必要です。多くの子どもは、慣れている場所でよく知っている人となじみの活動をする時に、持っている力を発揮することができます。様々な場面における観察から得られた情報について、複数の人で確認しあって、より客観性を高めることも大切です。

日常生活の実態について、睡眠、食事、排せつなどの様子や生活リズム等は、教育的なかわりと密接に関連してきます。保護者への聞き取りをする中で、家庭生活の中で抱えている訴えや願いなどについても知ることができるでしょう。

### **3. 情報の集約**

実態把握によって得られた情報をどのように集約し解釈するかは重要です。

#### **①全人的発達の視点**

得られた情報は、子どもの全人的発達を促す、という視点から集約され解釈される必要があります。大事なのは、子どもの発達の全体像をとらえるという視点です。重い障害がある場合、運動発達面や健康面に目が向けられがちですが、対人関係、情緒、コミュニケーション、認知など、あらゆる側面にわたって情報を得る必要があります。その際、例えば主障害が運動障害であれば、それが他の領域の発達にどのように関連しているか、という視点で解釈をすることも重要です。

#### **②横断的な視点と縦断的な視点**

横断的な視点とは、現時点での実態をとらえる視点です。縦断的な視点とは、現在に至るまでの経過すなわち生育歴・療育歴、これまでの生活環境など、過去にさかのぼってその時々における実態を把握し時系列でとらえる視点です。この2つの視点を組み合わせることで、子どもの将来の発達の見通しに関する手がかりが得られやすくなり、長期的な観点からの目標を設定する上で役に立ちます。

実態を把握し、情報を集約・解釈して子どもの課題を設定するプロセスでは、保護者と連携し、また、専門家と連携することがとても大切です。

#### 4. ぱれっとで紹介する実態把握の視点

子どもの発達の様相を概括的に把握するためには、発達検査を活用している場合が多いでしょう。「1. 発達検査とその意味」では、発達検査はどのような意味を持つものか、その結果をどのように活用するかを説明します。

手厚い支援が必要な子どもを、「家庭・学校・地域において、環境との相互作用の中で学び生活する学習者であり生活者である」という視点で見た時に、ぜひ実態把握に取り入れたいのが、子どもが学校以外の場所でどのような生活を送っているのか、についての情報収集です。「2. 一日の生活の流れのアセスメント」、「3. 子どもの生活マップ」で得られる情報は、子どもがどのような生活を送っているのかを知り、その生活をさらに豊かなものにするために、どんな教育的なかかわりができるのか、その手がかりとなるものです。

コミュニケーションは大変重要な実態把握の領域です。「コミュニケーションの手段がない」という子どもでも、生活場面における行動観察の中から、コミュニケーションの萌芽を見つけることができます。「4. 生活場面におけるコミュニケーション活用の状況」では、その視点を提供しています。

障害の重い子どもが少しでも主体的に生きるためには、子ども自身が外界の情報を得ることとはとても重要です。「5. 感覚障害（視覚）がある場合の行動観察の視点」「6. 感覚障害（聴覚）がある場合の行動観察の視点」「7. 諸感覚の活用に関するアセスメント」では、視覚、聴覚、そのほかの諸感覚の活用に関するアセスメントに関する行動観察等の視点を紹介しています。

子どものコミュニケーションや感覚活用の状況や、持っている力がわかったら、それらを発揮できるための環境を用意することが大変重要です。「8. 環境面のアセスメント」では、

子どもにとって、自分の持つ力を発揮して生活しやすい、また、教育的な環境になっているか、という視点を提案します。

最後に、重い障害のある子どもにとっては、興味関心があることをベースにしながら学習活動を組み立てることが大変重要です。「9. 子どもの興味関心のアセスメント」では、家庭と連携しながら手がかりを得る方法を提案しています。

## もっと知りたい人はこちら

1. 国立特別支援教育総合研究所（2015）.特別支援教育の基礎・基本 新訂版,共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築,ジアース教育新社.

## I. 実態把握

### 1. 発達検査の活用とその意味

#### こんなことはありませんか？

10歳になったショウさんに発達検査をおこなったところ、発達水準は3か月程度となり、中には測定困難な項目もありました。先生はショウさんの目標設定を行う際に、発達検査の結果を生かしたいと考えていますが、この結果をどのように理解し、ショウさんの目標を考えればよいかがよくわかりません。



#### ここがポイント！

重い障害がある場合は、検査の適用自体が難しいことが少なくありません。しかし、一部でも適用可能な場合には、発達の大まかな様子を把握したり指導のための有効な手がかりが得られたりすることもあります。

・検査がどのような背景のもとに提供され、検査項目がどのような意図をもって作成されているかについて知っておく必要があります。

・発達の側面から重い障害がある子どもの実態をとらえる視点を理解したうえで、子どもの目標設定に活かしましょう。

## このように考えてみましょう

発達の検査には、その用途から二つのタイプに大別できます。①発達の水準と輪郭を知るための「発達スクリーニング検査」と、②発達の現況と将来性について詳しく知り発達の課題を把握するための「発達診断検査」です。

### ①発達の水準と輪郭を知るための「発達スクリーニング検査」

発達スクリーニング検査は、本来、発達の遅れを早期に発見することをねらいとして開発されたものであり、昨今、発達障害児の療育や教育の現場では、子どもが現在どのような発達の水準にあるのか、また、どのような発達の輪郭をもっているのかを知ろうとする時に利用されています。『遠城寺式・乳幼児分析的発達検査法』『日本版デンバー式発達スクリーニング検査』などがあり、検査方法が簡便で短時間で検査可能ではありますが、全体的に、きめが粗いように思われる場合もあります。

### ②発達の課題を把握するための「発達診断検査」

発達診断検査は、個々の子どもの発達の現況と将来性について、子どもの内部で今まさに育ちつつある発達状態を予測し、子どもの発達のそれぞれの側面が相互にどのように関連しているのか、どの側面がどの程度どんなふうに進んでいるのかなどについて理解し、子どもの発達課題を把握しようとする時に活用される性質のものです。『実践と発達の診断』『早期発達診断検査』『乳幼児精神発達診断法』『新版K式発達検査』などがあります。発達水準が生後3年未満の障害の重い子どもの発達課題を把握するためには、それぞれの発達診断検査の長所・短所をよくよく吟味したうえで、検査対象となる子どもの特性も考慮に入れて、適切な検査を選択することが必要です。

## 具体的な実践に向けて 使えるツール ポイント

発達検査を活用して、発達水準が生後 3 年未満の障害の重い子どもの発達の現況を調べ、発達課題を把握しようとする時の視点を挙げます。

### ①発達の個人内差異（進んでいる側面と遅れている側面）を把握する視点

「3 か月の発達水準」等の発達の把握の仕方は、標準的な発達を基準にして個人間の違いに着目したとらえ方です。これに対して、障害の重い子どもの場合、個人内差異に着目し、発達の進んでいる側面と遅れている側面の両方をとらえる必要があります。どんな子どもでも、その子どもなりに発達の進んでいる側面が必ずあります。また、遅れている側面があります。子どもの発達課題を把握しようとする際には、それらがどのように関連し合っているかについても、理解するよう努めることが肝要です。それは、発達の進んでいる側面をさらに促進させることで、遅れている側面を補うことができるからです。

また、どんな子どもでもその子どもなりに発達が伸長する時期がありその後停滞する時期が訪れます。一人の子どもの発達の変化を追跡して縦断的にとらえる視点も、課題を把握するうえで重要です。

### ②発達を質的に把握する（発達状態を障害状態との関連でとらえなおす）視点

一般的には、障害のある子どもも健常な子どもの標準的な発達の順序をたどることが仮定されています。「発達の遅れ」という時、それは健常児の標準的な発達に比べて速度が遅い、すなわち量的な遅れをさしています。

しかしながら、障害の重い子どもでは、健常児の発達には見られない質的な発達の違いが認められることもあり、これを「発達の偏り」と呼ぶこともあります。障害の重い子どもの発達では、その子どもの障害状態や生活経験などが深くかかわっていることが多く、発達過程のたどり方も個人差が大きいです。一人一人に固有の発達過程があることを念頭に置きながら、実態把握を行う柔軟性が要求されます。子どもの発達課題を把握しようとする時には、その発達状態を、障害状態や生活経験などとの関連の中でとらえ直すことが必要になります。

### ③将来の発達状態を潜在能力としてとらえる視点

発達検査では、その現況だけでなく、子どもの中に何が育とうとしているのかをとらえ、今まさに育ちつつある予測的な発達状況を潜在能力としてしっかり把握する必要があります。障害の重い子どもは、自ら環境とかかわりその子にふさわしい法則性をもって主体的に発達を遂げていきます。子どもの中に芽生えつつある力に注目し、子どもがその力を発現しやすい教育的環境を検討しましょう。

### ④タテの発達とヨコの発達の視点

発達は、直線的・連続的過程ではなく、螺旋的・段階的な過程をとるものです。発達には「タテの発達」と「ヨコの発達」があります。「タテの発達」とは、より高次の発達水準への移行を意味します。これに対して、「ヨコの発達」とは、その発達の段階においてすでに獲得された行動が豊かになったり確実にしたりする行動の変化であり、その行動自体の横の広がりを意味します。障害のある子どもの発達を考えると、ヨコの発達は非常に重要で、ヨコの発達が充実することがタテの発達の前提となります。また、タテの発達はある程度のところで停滞することを念頭に置いて、今持っている力で豊かな生活を送るために、ヨコの発達が充実するような支援の視点を持つことも必要です。

### ⑤環境との相互作用の視点

発達に対するアプローチでは、その子の発達段階を踏まえた指導を行うことが重要ですが、発達心理学では、物理的環境・人的環境、あるいはもっと広く文化そのものとの相互作用によって子どもは発達していくという観点が強調されます。その子どもの発達段階において、どのような物理的環境や人的環境が必要であるかを考えなくてはなりません。10歳の子どもであれば、発達水準が3か月であっても、10年間の生活経験があることを踏まえた教育的環境を設定することはとても大切です。

障害の重い子どもの発達課題の設定にあたって考えなければならないことは、子どもの行動の発現を求め、自ら外界の物や人へ係る自発的な行動を育て、広げさせていくことです。

このとき、その子どもが外界（物や人など）に対してどのような興味や関心があるかといった視点が大変重要になります。このような物や人との関係を基盤にして、運動や感覚の機能を向上させ、より高い次元へと進めていく、あるいは今持っている力を充実させる課題を、その子どもに応じてきめ細かく設定していくことが重要です。

これを実践してみたら・・・

ショウさんは「発達スクリーニング検査」で「3か月の発達水準」という結果が出ていましたが、先生は理学療法士と協力して、発達課題を把握するための「発達診断検査」を行ってみました。その結果、ショウさんの発達のプロフィールの中で比較的発達が進んでいる領域と、遅れている領域がわかりました。

例えば、進んでいる情緒面では「近い大人に対して要求を表す」ように目で訴える様子が観察されます。遅れている領域は運動面で、今は「腰と胸を支えられ、垂直に保たれると不安定ながら首が座る」状態です。しかし、しっかりと腰と胸が支えられた状態では、「(眼球だけでなく)頭を動かして動く事物を滑らかに追視する」行動が芽生えそうな様子を観察することもできました。ショウさんは自分で頭を動かせることをほめられて、誇らしげでした。

先生はお母さんや理学療法士と相談して、ショウさんが「頭を自分で動かして、見たいものを見る」ことを発達課題として掲げました。バルーンにうつぶせになって体幹がしっかり安定している状態になると、ショウさんは首を挙げ、前にいる先生の顔や、好きなおもちゃを見ようとします。最近のブームは、ショウさんのお気に入りの隣のクラスの女の先生が、右から、または左から「ショウさん、こっちだよ！」と名前を呼んで、ショウさんが呼ばれた方向を向く遊びです。ショウさんは時間をかけて頭部をコントロールしながら動かし、先生から呼ばれた側を向きます。先生と目が合うととても嬉しそうです。

## <障害の重い子どもによく用いられる発達検査>

遠城寺式・乳幼児分析的発達検査法

日本版デンバー式発達スクリーニング検査

実践と発達の診断

早期発達診断検査

乳幼児精神発達診断法

新版 K 式発達検査

ポーター式乳幼児発達検査

MEPA（ムーブメント教育・療育プログラムアセスメント）Ⅱ

感覚と運動の高次化発達診断チェックリスト（宇佐川、1998）

障害の重い子どものコミュニケーション評価と目標設定（坂口、2006）

## もっと知りたい人はこちら

川村秀忠（2013）. 障害の重い子の早期発達診断 新訂版. ジアース教育新社.

藤田和弘（1991）. 重度児の評価について. 肢体不自由教育、99、4～10.

国立特別支援教育総合研究所（2006）. 平成 16 年-17 年度 課題別研究「重複障害のある  
児童生徒のための教育課程の構築に関する実際研究. 5～8.

下山直人他（2011）. 新しい自立活動の実践ハンドブック. 全国心身障害児福祉財団.

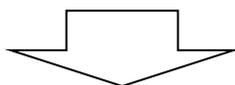
## I. 実態把握

# 2. 一日の生活の流れのアセスメント

### こんなことはありませんか？

エミリさんは、小学4年生です。肢体不自由特別支援学校に通っています。人とかかわることが大好きで、親しい人には表情や声で気持ちをアピールしています。

4月、新担任の先生は、教育計画の立案にあたり、家庭からの希望を聞いています。エミリさんのお母さんは、家事をしている間一人で遊べるようになってほしいと希望しています。また、お母さんは、新しく担任になった先生に、一人で遊べるようになってほしいこと以外に何を伝えたらいいのかな、エミリさんの家庭での生活をイメージしてもらうことができるかなと、少し心配です。新担任の先生は、エミリさんの家庭での様子をイメージできず、どのように取り組めばいいのか、困っています。



### ここがポイント！

子どもの一日の生活の流れを把握し、子どものニーズや保護者の希望が生じる具体的な場面を知り、家庭と連携した取り組みを行いましょう。

## このように考えてみましょう

障害の重い子どもとかかわる際に、学校以外の場で子どもがどのように過ごしているのかは、大変重要な情報です。学校と家庭が連携して行っている日々の連絡帳のやり取りは、教員が子どもの家庭での生活の様子を把握してかかわったり、保護者が学校での学習や生活の様子を知るために、重要な役割を果たしています。食事や排せつ、健康状態等、子どもの生活を一日を通してトータルで見ることにも活用されているでしょう。

さらに、教育計画を立てるにあたっては、家庭で生じている子どものニーズや保護者の希望を知って、学校での教育目標や支援を検討する、という視点が重要です。教育計画は、基本的に学校の生活をベースに立案されることが多いようです。そのため、学校での取り組みに成果があっても、保護者がその成果をどう生かせばよいか、分かりにくいことがあります。子どもの一日の生活の流れを把握し、子どものニーズや保護者の希望が生じる具体的な場面を知ること、子どもの生活をより豊かにするための目標を検討することが可能になるでしょう。

しかし、生活の流れを一日まとめて見るのは、案外、機会もなく難しいものです。そこで、保護者に時間ごとの生活の流れを表に書いてもらいましょう。

一日の流れをもとにして話をする時、ニーズが生じている時間や楽しくしたい時間を明らかにし、さらに、今まで工夫したこと、挑戦したいことも書いてもらうことで、生活実態から課題設定に向けての検討がよりスムーズになるでしょう。

### 1. 教員にとっての利点

- ①ニーズのある時間帯も含めた一日の生活全体の流れを知ることができます。
- ②一日の流れのなかで考えることで、生活の実態に応じた子どもの課題について検討することができます。
- ③生活の流れの中での具体的な希望が分かるだけでなく、課題にかかわる情報（今まで工夫

してきたこと等)も記載されているので、課題検討がよりスムーズに行えます。

④特定の日について書いてもらうので、どうしてその日を選んだのか(休日や平日、ショートステイなど)理由を聞くことができ、困っている背景が分かりやすくなります。

## **2. 保護者にとっての利点**

①表に書くことで、改めて生活を振り返ることができます。そうすることで、楽しくしたい時間や今まで試行錯誤したことや挑戦したいこと等の漠然としやすい事柄が、明確に浮かび上がってきます。

②表にまとめることで、初めてかかわる相手にも情報を伝えやすくなります。

## **3. 両者にとっての利点**

①保護者が気付いていなかった生活の過ごし方のポイント(この時間で何か挑戦できそうだな等)を、表に基づいた話合いの過程で、教員と一緒に見つけることができます。

以上の点を踏まえて、教育計画を立てるにあたり、希望やこれまでの試み等を含め、生活に即した課題検討へとつなげていくことができます。

## 具体的な実践に向けて 使えるツール ポイント

1日の生活を振り返りながら、課題を検討するため、事前に保護者に表を書いてもらいましょう。その際、余暇、コミュニケーション、姿勢など、大きくテーマを決めると書きやすいでしょう。矢印の順に記入すると、段々と希望がはっきりとできるようになっています。

| 1日の生活を振り返ろう                      |  |                                    |                          |
|----------------------------------|--|------------------------------------|--------------------------|
| ～ 例えば 11月3日 だとしたら～ 氏名【 エミリ 】     |  |                                    |                          |
| ←(学校が休みの日)                       |  |                                    |                          |
| 1日の流れ                            | ちょっと困っている時間<br>もっと楽しみたい時間                                      | うまく過ごせるときに行っていること<br>これまでに工夫してきたこと | できるようになりたいこと<br>やってみたいこと |
| 4<br>5<br>6 起床<br>朝食             |  |                                    |                          |
| 7<br>8<br>9 テレビ・DVDを見る           | お母さんが用事をしているとき、自分の番組が終わったら機嫌が悪くなり、寝返りでそばまでやって来る。<br>(兄弟がいない場合) | 自分用の操作しやすいリモコンを作っている               | 家事をしても一人で遊んで欲しい          |
| 10<br>11<br>12 昼食                |  |                                    |                          |
| 13<br>14<br>15 昼寝<br>(起きていたらおやつ) |  |                                    |                          |
| 16 散歩                            | 雨が降っていても散歩に行きたがる   | 少しベランダで過ごすようにしている                  |                          |
| 17 入浴                            |  |                                    |                          |
| 18 夕食                            |  |                                    |                          |
| 19<br>20 テレビ                     |  |                                    |                          |
| 21<br>22 就寝                      |  |                                    |                          |
| 23<br>24<br>1<br>2               |  |                                    |                          |

話し合いの中での新しい情報を教員が加筆

この表が完成したら、保護者と担任で検討します。話合うことで新しく見えてきた事柄や挑戦したいことなどは、表に書き加えていくとよいでしょう。また、課題に取り組み始めたら、連絡帳等を活用して、一日を通した課題実施状況（一人で動画操作をして過ごした時間や姿勢変換の回数など）について、家庭と連携してチェックすることもよいでしょう。

## これを実践してみたら・・・

### ①新担任にとって

新担任の先生は、食事や就寝、自由時間など、エミリさんの生活を大まかにイメージすることができました。

保護者からの希望は、「家事をしている間、一人で遊んでほしい。」という漠然としたことでしたが、「ちょっと困っている時間」の記載から、好きなテレビやDVDを見ることで一人で過ごせるのではないかとヒントを得ることができました。また、「これまでに工夫してきたこと」を尋ねると、扱いやすい本人専用のリモコンを作成してきたことも分かりました。

その結果、学校では、見たい動画に変えてほしい時に VOCA(Voice Output Communication Aids)で呼ぶことを目標とした課題に取り組むことができました。家庭のニーズを知り生活を振り返ることで、学校での具体的な課題に結びつけることができたのです。新担任にとって貴重な情報が得られ、課題検討の大きな助けとなりました。

### ②保護者にとって

生活を振り返る表は、どう書けば良いか最初は戸惑いもありましたが、気軽に書いてみると改めて生活を振り返ることができたようです。そして、新担任の先生に、エミリさんの生活や今まで工夫してきたことや希望について、まとめて伝えることができ、生活に即した課題に学校で取り組んでもらえたことがよかったと感じたそうです。

家でも困った時に、声で呼ぶことが多くなるという変化が見られ、学校での学習が家庭でも生かされ、保護者も成果を実感することができました。

## 《他にも・・・》

エミリさんのような場合以外にも、以下のような活用が考えられます。自分から移動することが難しい子どもで、同じ姿勢で過ごす時間が多いという保護者の悩みがあれば、日常生活の流れやその時の姿勢を振り返りましょう。

その中で、腹臥位や側臥位で過ごせそうな時間を見つけたり、日常にあるクッション類をどう使ったら安定した姿勢がとれるかを考えたりして、学校でも毎日安定した姿勢保持に取り組むことができるでしょう。

## もっと知りたい人はこちら

1. 今川忠男(1999)発達障害児の新しい療育：子どもと家族のその未来のために、三輪書房
2. Saito, Y. & Turnbull, A.(2007).Augmentative and alternative communication practice in the pursuit of family quality of life: a review of the literature. Research and Practice for Persons with Severe disabilities、 32、 50-65.2007.

## I. 実態把握

### 3. 子どもの生活マップ

#### こんなことはありませんか？

エミリさんは、小学4年生です。自分の気持ちを発声や視線で伝えようとすることができます。

新しく担任になった先生は、将来の生活につながる学習内容を考えて指導したいと考えていますが、どんな題材や学習内容を設定しようか悩んでいます。

そこで、家庭や地域でどんな活動をしながら生活しているのかをわかりやすく整理したいなあと思いました。



#### ここがポイント！

子どもが地域の中で、どのような生活を送っているかを把握し、子どもの生活の質を高める取り組みを行いましょう。

## このように考えてみましょう

子どもが将来自分らしい豊かな生活を送るために、学校では「自立と社会参加」を目指して「生きる力」を付けていく指導が大切です。その力は、かかわる人との「関係性」や「相互作用」の中で育ち、子どもと社会との「関係」を作っていくことにつながります。そのためには、子どもの地域生活を含めた全体像を把握することが大事です。そこで、地域生活をまとめて見るために、「生活マップ」を作ってみましょう。

「生活マップ」は・・・

- ・子どもと家族を取り巻く地域とのつながりや地域生活の様子を知ることができます。
- ・地域資源の活用状況、子どもと家族の支援状況、子どもにかかわる人々との「関係の在り方」について把握できます。
- ・学校の中だけでは完結しない、現在と将来の生活の質を高めるための指導目標や支援の内容等を検討するのに役立ちます。
- ・保護者と一緒に共有でき、見えてきたことから、支援の方向性について話合うことができます。

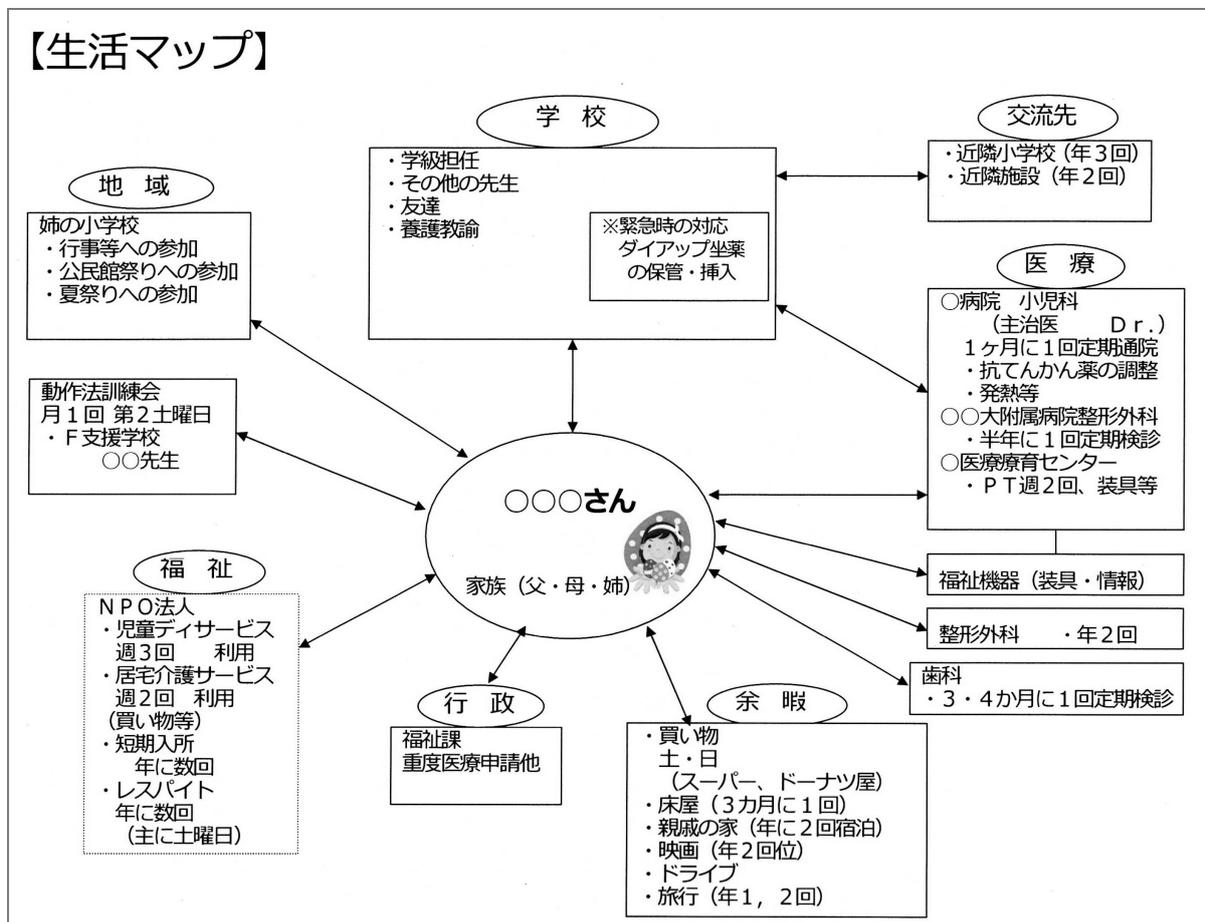
生活マップを作成し、わかった情報を基にして指導目標や指導内容を検討して授業作りを行い、指導の結果を子どもの地域生活や家庭生活の中に般化していきましょう。

## 具体的な実践に向けて 使えるツール ポイント

保護者から地域生活全般の聞き取りをし、一緒に「生活マップ」を作っていきます。

医療機関、福祉施設、行政機関、余暇活動、放課後や休日、交流先など、あらかじめ枠を準備し、書きこんでいきましょう。連携のとれている機関同士は矢印で結び、具体的な活動内容等について記入していくと、生活の全体像がはっきりしてきます。

「生活マップ」を作成しながら、家庭や地域での活動、地域生活の中での興味・関心、交友関係や外出経験などについても把握していきましょう。



「生活マップ」からわかったことを基に、現在の授業や指導内容等を見直し、子どもが学習したことを生活の中へ反映させていきましょう。

## これを実践してみたら・・・

先生は、エミリさんの「生活マップ」を作ったことで、エミリさんと家族の方が地域の中でどんな生活を送っているのか、大まかに把握することができました。

先生は、現在学校で指導している「視線で選ぶ」というコミュニケーション手段を使って地域生活に般化させていくための学校での指導内容や指導場面について考え、国語や自立活動、校外学習の中で指導をしていくことにしました。そして、授業改善シートを活用し、これまでの授業を見直すとともに、生活全体への反映を考えながら授業改善に取り組み始めました。その結果、よく行くお店で、ほしい物を視線で選んでお母さんに伝えたり、お母さんの支援を受けながら、店員さんにも自分で選んだほしいもののカードを渡したり、やり取りができるようになってきました。また、エミリさんは、前にも増して自分からの発声や要求が多くなり、いろいろな面で積極的に人とかかわろうとするようになってきました。お母さんもそのことをとても喜び、生活の中でもっとエミリさんが自分でできることはないかという視点で考えることができるようになってきました。

生活マップを作ったことで、外出支援はほとんどお母さん一人でがんばっていたこともわかりました。そこで、先生は、福祉サービスの情報提供と家族以外の支援者を増やすことの大切さなどを伝えると、お母さんは、エミリさんの世界を広げるために、ヘルパーさんを活用することにしました。ヘルパーさんにも、同じように外出先での支援をしてもらい、エミリさんは、お母さん以外の人とも買い物や余暇活動を楽しめるようになりました。

## 【授業の取り組みを生活に反映するためのシート例】

| 「授業における観点位置付け・授業改善シート」  |   |                              | 平成 年 月 日 (検討日 月 日)    |   |  |   |
|---|---|------------------------------|-----------------------|---|--|---|
| 学部・学年   | 小学部・4年  | 場 所                          |                       | 長期目標  | 支援を受けながら自分の欲しい物を買うことができる。  |   |
| 教科等名  | 自立活動  | 指導者                          |                       | 今年度の目標  | 自分の欲しい物ややりたいことを、カードを見て視線で選び、人に伝える。   |   |
| 題材名   |   |                              |                       | 授業の目標   | 実物(空箱)やカードを視線で選ぶ。<br>スーパーで材料を買ってくることを理解する。   |   |
| 学習内容  | 支援と指導上の留意点  | 将来につながる育てたい力<br>キャリア発達段階・内容表 |                       | 気づき   |  |   |
| 1  ほんのりあまいさつ<br>スイッチを押して挨拶<br>する。<br>2  作りたいおやつを選<br>んで決める。<br>・フルーチェ<br>・ホットケーキ<br>3  必要な材料を知る。<br>・卵<br>・牛乳<br>・フルーチェ<br>・ホットケーキの素<br>など<br>4  どこに買い物に行く<br>か考える。<br>・写真カードを視線を移<br>して選ぶ<br>5  いつ誰とどこへ何を<br>買いに行くかを知り、<br>写真カードをボード<br>とシートに貼る。<br>6  おわりのあまいさつ | ・座位保持いすを調整しス<br>イッチが押しやすい前傾<br>姿勢になるようにする。<br>・空箱を準備し、ひとつづ<br>つ提示してよく見せてか<br>ら、二つの空箱を選ばせ<br>るようにする。<br>・選んだおやつ(材料) (買<br>ってくるものと同じ空<br>箱)を提示する。<br>・お母さんとよく行くスー<br>パーの写真カードを2種<br>類準備しひとつづつ提示<br>してよく見せてから、二<br>つのカードを選ばせるよ<br>うにする。<br>・カレンダー、お母さんや<br>お店の写真、実際に買っ<br>てくる空箱で買ってくる<br>ものを視覚的に確認し、<br>シートを一緒に作成す<br>る。 | 主たる観点                        | 関連する観点                | 次時授業改善点   | 教育課程への反映   | 生活全体への反映  |
|   |   | 【意思決定<br>能力:自己選<br>択・決定】     | 【将来設計<br>能力:やりが<br>い】 | ・タブレット端<br>末等を活用し<br>作っているこ<br>ろや出来上<br>がった様子、<br>スーパーなど<br>映像で分かり<br>やすく伝え<br>る。 | ・あまいさつのス<br>イッチは、どの学<br>習場面でも活用<br>する。<br>・他の学習場面<br>でも2種類の道具<br>や活動(準備<br>し、どちらかを<br>選んで活動でき<br>るようにする。 | ・お母さんと一緒<br>にスーパーに行<br>き、買ってくる物<br>と同じ空箱を持っ<br>て見比べながら視<br>線を選び、買い物<br>をしてくる。 |

国立特別支援教育総合研究所(2008)一部改編

### もっと知りたい人はこちら

1. 国立特別支援教育総合研究所(2007). I C F 及び I C F - C Y の活用 試みから実践へ  
—特別支援教育を中心に—.ジヤース教育新社
2. 国立特別支援教育総合研究所(2011).キャリア教育ガイドブック、ジヤース教育新社

## I. 実態把握

### 4. 生活場面における

### コミュニケーション活用の状況

こんなことはありませんか？

エミリさんは今、小学2年生です。学校ではシーツブランコやトランポリンなどの揺れ遊びが好きで、笑顔になります。感触遊びなどは少し苦手で、粘土に触れると最初は手を引こうとする様子が見られます。

新学期の保護者との面接では、「家族と一緒に使えるコミュニケーションの方法があるといいのですが、どうしたらいいでしょう」という話題がでました。

学校でも朝の会で写真を使って説明していますが、活動やお友達について理解している様子は見られません。また、その活動がやりたいかどうかについて「はい」「いいえ」の意思は、まだはっきりわかりません。



ここがポイント！

子どもの生活・学習している場面の行動観察から、コミュニケーション方法の手がかりを探りましょう。

## このように考えてみましょう

障害の重い子どもが力を上手に発揮できるのは「知らない場所で、知らないおとなと、初めての活動をする」時よりも「よく知っている場所で、普段からかかわっているおとなと、よく知っている活動をする」時、だと感じませんか？周囲の状況を把握することが難しい子どもの立場に立って考えると、日常生活のルーティーンやなじみの活動には、子どもが予測できる手がかりとなる情報（「いつのも歌が聞こえたから、楽しい朝の会が始まるぞ」「〇〇先生がカップを並べているから、これからお茶の時間だ」など）がたくさんあることに気づきます。この、子どもにとって意味のある自然な環境の文脈が、子どもが周囲の状況をわかり（受信）、意思を表しながら主体的に参加する（発信）ことを支えています。

子どもの生活・学習している場面の行動観察では、子どもが、自分のかかわる活動や状況をどのような手がかりで理解しているのかを探ってみましょう。

例えば、赤いキルティング布で作られたシーツブランコの活動について、教室の子どもたちはそれぞれ、様々な情報を手がかりにして予測をしていることが観察されます。

### <シーツブランコの活動に関する手がかりの例>

- ①シーツブランコにのせられると揺れを期待するように体を動かす
- ②赤いものを持った人が来るとシーツブランコとわかり笑う
- ③キルティングの布の手触りでシーツブランコとわかりのりこもうとする
- ④シーツブランコの入った箱を教員が準備するのを見て近づく
- ⑤朝の会の時に今日の活動の紹介でシーツブランコの歌を聴いて喜ぶ
- ⑥朝の会の時に今日の活動の紹介でシーツブランコの絵カードを見て喜ぶ
- ⑦朝の会の時に今日の活動の紹介で「シーツブランコ」の手話で喜ぶ
- ⑧明日は「シーツブランコしようね」という教員の話聞いて喜ぶ

## 具体的な実践に向けて 使えるツール ポイント

これらの例のように、子どもは発達段階に応じて、また活用できる感覚で、様々な周囲の手がかりで「シーツブランコ」という活動をとらえています。実際の活動の場にある手がかり（体を包む布の感触、布の色や手触りなど）から、場所や時間を離れて使われる手がかり（絵カード、音声言語など）まで、様々な段階のものがあります。また、視覚、触覚、聴覚など、様々な感覚をつかった手がかりがあることがわかるでしょう。

① まず、子どもが生活・学習している場面を観察し、子どもがその活動や状況を予測する手がかりとしてどのようなものがあるかを、リストアップしてみましょう。

### <子どもが活動や状況を予測している手がかりの例（使っている感覚）>

- 帽子をかぶる → 散歩だとわかって喜ぶ（視覚、触覚）
- ひげを触る → お父さんだとわかって落ち着く（触覚）
- キーボードの準備を見る → 朝の会が始まることわかる（視覚）
- 給食のワゴンの音が聞こえる → 食事とわかって口を動かす（聴覚）
- 消毒液のにおいをかぐ → 泣いて嫌がる（注射の記憶など）（嗅覚）
- 首の後ろに触られる → 抱っこされるとわかり体に力が入る（触覚）

② 次に、子どもにわかる手がかりを検討し「意図的に」使ったりつくったりしたものを手がかりとして提示しましょう。声をかけるだけではわからないことが、伝わりやすくなります。

### <意図的に使う子どもにわかる手がかりの例（使っている感覚）>

- 帽子を見せる。触らせる → 散歩に行こう（視覚、触覚）
- 首の後ろに2回触れる → 抱っこするよ（触覚）
- マットの切れ端を触らせる → マットに行って休憩しよう（触覚）
- ドアのツリーチャイムに触れて鳴らす → 教室に着いたよ（触覚・聴覚）

## これを実践してみたら・・・

エミリさんが大好きなシーツブランコの活動について様子を観察すると、朝の会の時に「シーツブランコの歌」を教員がエミリさんの体に触れながら歌った時に笑顔になることが観察されました。また、シーツブランコにのるとシーツブランコの布の手触りを自ら手を出して確かめている様子が見られました。

学校では、エミリさんに「シーツブランコ」の活動の予告として、ハンカチ程度の大きさのシーツブランコと同じ布をエミリさんに触ってもらいながら、「シーツブランコの歌」を歌うようにしました。繰り返すうちに、エミリさんも自分から布に触ってくれるようになり、シーツブランコへの期待も増すようです。

このような方法をお母さんにも伝え、家庭の生活の中でのエミリさんに伝える手がかりも、一緒に検討してみることにしました。

## もっと知りたい人はこちら

1. 国立特別支援教育総合研究所（2009）. 重複障害児のアセスメント研究－視覚を通じた環境の把握とコミュニケーションに関する初期的な力を評価するツールの改良.
2. 中澤恵江（2000）. 障害の重い子どもとのコミュニケーションと環境をめぐって. 肢体不自由教育（146）、20-29.

## I. 実態把握

### 5. 感覚障害（視覚）が

### ある場合の行動観察の観点

#### こんなことはありませんか？

エミリさんは、今5歳です。地域の療育センターに週1回通っています。

揺れ遊びが大好きで、センターの先生やお母さんと一緒にシーツブランコをしている時は、とても楽しそうで、笑顔が見られます。

保護者から、「視覚にも障害があると言われたのですが、病院ではきちんと検査ができません。家庭でも見えているのかどうかよくわかりません。」と尋ねられました。

療育センターでも、光るおもちゃで遊びますが、本当に見えているのかどうか、どの程度見えているのかよくわかりません。



#### ここがポイント！

子どもの生活している場面の行動観察から、見えの実態把握の手がかりを探りましょう。

## このように考えてみましょう

視覚は学習や生活をする上で、とても大切な感覚ですが、視覚障害に加えて障害が重く、重複している子どもへの視力測定は明確な反応が得られないといった理由で、測定困難とされることもしばしば見受けられます。

しかし、障害が重く、重複している子どもの視覚に関しては、治療を目的とする医療機関における検査とは異なり、子どもの生活がより豊かになるために、どのような視機能が活用でき、その結果、どのような学習や生活環境を整えていけばよいのか、といった視点を持つことが重要です。

どのような物が見え、どのような物が見えていないのか、学校だけでなく、家庭の中で過ごしている時の様子について、見ている物の大きさや材質を視距離や姿勢と併せて記録し、医療機関における視力や視機能の測定結果と照らしあわせていくことで、より正確な実態把握が可能となります。

また、視覚は6歳まで発達すると言われていますが、学習や生活の環境を整え、見やすくなることで「見ることを学習する」機会が増えると、視反応に変化が見られる場合もあります。

家庭と連携し、継続して視機能を把握しましょう。

## 具体的な実践に向けて 使えるツール ポイント

### 【視力を知りたい時に使えるツール】

- ①ランドルト環 字1つ視標
- ②絵視標
- ③Teller Acuity Card
- ④縞視標リー・グレーティング
- ⑤森実式 Dot Card
- ⑥視力を求める公式

「視力」とは、「細かいものを見分ける力」ととらえることができます。どれくらい細かいものが見えているのかを知りたい時には、上記に挙げたツールを使って視力値を算出することができます。「言語で応答ができる」「視線が活用できる」等、子どもさんの特性に合うツールを用いましょう。

また、①～⑤のツールの使用が難しくても、普段「見えているのでは？」と思われる物の大きさと、視距離（どれくらいの距離に提示すると見えているか）を把握しておくこと、⑥により、推定視力を算出することができます。

いずれのツールを用いる時にも、「検査」ではなく「活動」もしくは楽しい「遊び」の一つとして実施すると、子どもがリラックスして取り組む他、モチベーションも上がり、より日常的な結果が得られるでしょう。また、子どもが飽きないように、短時間で実施することもポイントです。ツールを用いる際には事前に検査方法を熟知しておくことよいでしょう。

### 【光覚、色覚、明暗、両眼視等を知りたい時に使えるツール】

|          |  |
|----------|--|
| 提示する物の例  | 懐中電灯、ペンライト、布、色のついたボール、積木、スプーンなど日常使用している物 |
| 観察する場所の例 | 日向と日陰、暗室への入退室、自然光と蛍光灯下など                 |

提示する物は、まずは光るものや明瞭な色の物から提示し、提示した時の視距離や反応を記録しておきましょう。また、見えていると思われる際の姿勢も併せて記録しておく、見えやすい姿勢や見えやすいポイント（視野）を把握することにもつながります。

### 【観察のポイント】

|                    |  |
|--------------------|--|
| 眼球の動き              | 注視する、眼振がとまるなど  |
| 顔（頭部）の動き、表情の変化     | 視対象に顔を近づけようとする、視対象から顔をそむけようとする、笑うなど                      |
| 手や腕の動き             | 視対象を提示すると、それまでの動きがとまる。視対象に手を伸ばそうとするなど                    |
| 姿勢                 | 仰臥位、側臥位等、見えていると思われる時の姿勢や、提示すると上を向く等、視対象を提示した時の姿勢や頭部の変化など |
| 視距離 見せる時の速さ<br>や方向 | 眼前から何cmの距離に提示したか<br>ゆっくり近づける、視対象を左から右へ動かすなど              |

## これを実践してみたら・・・

エミリさんは、暗室での光遊び、懐中電灯の光、ボール（赤色や黄色）、ビックマックススイッチ（赤色）等を見ている様子がかがえしました。また、その時は比較的側臥位や仰臥位の姿勢をとっている時が多くあり、速く動くものを追うことは難しい様子でした。ある日、視覚障害特別支援学校の先生が、エミリさんが見えている様子を示した物の大きさと視距離から、視力（推定値）を算出してくれました。話合いの中で、「赤や黄色の物が見えやすいようですね。」と、エミリさんに見せたいものがある時にはコントラストをつけて見せる、20 cmの視距離に提示する、物を見せる時はゆっくり見せることや姿勢等、学習や生活上の配慮や工夫を説明してくれました。

そこで、療育センターのエミリさんの担当の先生は、毎日赤い服を着ることにしました。すると、エミリさんが先生の動きを追っている様子が観察され、先生がいない時には探しているような様子も見られるようになりました。

以降、お母さんはエミリさんのコップの色を赤色に決めました。お茶を飲む時に必ずこのコップを用いることを続けたところ、エミリさんはコップを見せられるとニコッと笑ったり、顔をそむけることで「お茶を飲む」か「お茶は飲まない」という意思を表出することができるようになりました。

## もっと知りたい人はこちら

1. 大川原潔他（1999）視力の弱い子どもの理解と支援、教育出版.
2. 小口芳久編著（1995）小児眼科のABC—最新の診断・治療的アプローチ—.日本事新報社.
3. 湖崎克（1985）目のはたらきと子どもの成長.築地書館.
4. 国立特別支援教育総合研究所(2009)専門研究 A 重複障害児のアセスメント研究—視覚を通じた環境の把握とコミュニケーションに関する初期的な力を評価するツールの改良—研究成果報告書.

## I. 実態把握

### 6. 感覚障害（聴覚）が

### ある場合の行動観察の観点

こんなことはありませんか？

メグさんは、今2歳です。地域の療育センターに週1回通っています。家庭ではテレビの幼児向け番組が大好きで、なじみのある歌のダンスを見て、一緒に踊っています。

保護者から、「聴覚にも障害があると言われたのですが、病院ではきちんと検査ができません。家庭でもきこえているのかどうかよくわかりません。」と尋ねられました。

特別支援学校の教育相談の場面でも、音のなるおもちゃで遊びますが、本当にきこえているのかどうか、どの程度きこえているのかよくわかりません。



ここがポイント！

子どもの生活している場面の行動観察から、きこえの実態把握の手がかりを探りましょう。

## このように考えてみましょう

聴覚障害は他者から見て非常にわかりにくい障害であるとともに、聴覚障害の種類や程度により一人一人きこえ方は異なります。加えて、障害が重く、重複している子どもさんへの聴力測定は明確な反応が得られないといった理由で、測定困難とされることもしばしば見受けられます。

しかし、医療機関や教育機関における聴力測定が困難でも、日常生活における行動を観察することによって、きこえているのかきこえていないのかを推測することは可能です。

私たちの身の周りには様々な音があふれています。日常生活の中における環境音に対して、子どもがどのような行動を示すか観察してみましょう。

行動観察のポイントは、音が鳴った時の振り向きだけでなく、驚く、泣く、音を探す、身体の一部が動く、発声、笑い、呼吸の変化といった様子や、逆に音がなくなった時の動き、停止、方向、変化等の様子等も併せて記録をとることです。また、音源からの距離も必ず記録しておきましょう。

学校だけでなく、家庭の中にある様々な音をきかせた時の様子も記録し、医療機関における聴力測定結果と照らしあわせていくことで、より正確な聴力の把握が可能となります。

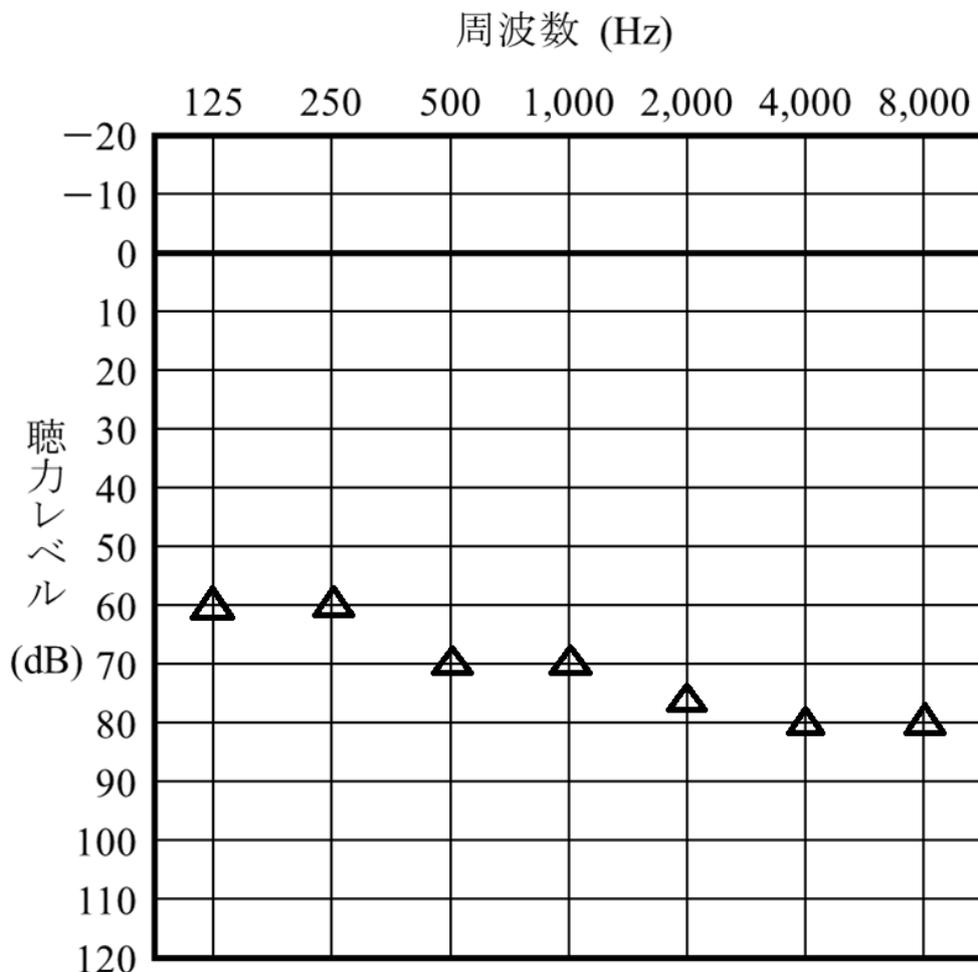
## 具体的な実践に向けて 使えるツール ポイント

### 身の周りにおける環境音の例

|      |  |
|------|--|
| 学校で  | バスのドアの開閉音 教室のドアの開閉音<br>靴をバタバタさせる音 朝の会のCDの音 校内放送<br>給食の食器が触れる音 水を流す音 電気をつける音<br>鍵をかける音 窓やカーテンの開閉音 ほうきで履く音<br>ピアノやエレクトーン、太鼓等楽器音 トイレの流水音<br>先生（男・女）の声 お友達の声 チャイム 拍手 |
| 家庭で  | 電話のベル 携帯電話の着信音 時計の音 掃除機の音<br>まな板の音 玄関チャイムの音 犬の鳴き声<br>食器どうしがぶつかる、テーブルに食器を置いた音<br>洗濯機が回る音、ブザーの音 赤ちゃんの声<br>ナイロン袋から物を取り出す音 冷蔵庫の開閉音                                   |
| 屋外で  | 自動車のクラクション 自転車のベル 鳥の鳴き声<br>駅のアナウンス 救急車やパトカーのサイレン<br>オートバイの音 飛行機の音  |
| 自然の音 | 雷 雨 雨が雨戸に触れる音 ひょう<br>波 風   |

私たちの身の周りにはあらゆる音があふれており、これらはほんの一例です。それぞれの学校や家庭での環境音についてふりかえり、リストを作るのも良いですね！

学校や家庭の中にある様々な音をきかせた時の様子を記録しておき、後日騒音計を使って、その音の周波数と音の大きさを調べ、オーディオグラムを作成することにより、標準聴力検査だけでは得られない、もしくは標準聴力検査が困難な子どもの聴力が推定できます。騒音計は高額ですが、聴覚特別支援学校の先生に貸借を依頼する、もしくは測定してもらおうと良いでしょう。



メグさんのオーディオグラム (推定)

△は、きこえていると思われる値

## これを実践してみたら・・・

メグさんは、うるさいところでの話し手の声、ヒソヒソ話、鈴やディナーベルなどの音はきこえていない様子であること、太鼓の音やドアの開閉音に気づくといった学校の様子を聴覚特別支援学校の先生にお話ししたところ、先生が騒音計を使って、メグさんがきこえている・きこえていない様子を示した音の大きさと周波数を測定してくれました。その後 話合いの中で、「周波数の高い音や、小さな音はきこえにくい可能性がありますね。」と、行動観察から推測されるオーディオグラム（聴力図）を作成・説明してくれました。

こういう方法をお母さんに伝え、学校でも取り組んでみることになりました。また、家庭での様子をお母さんに観察してもらい、その記録と医療機関における測定結果も併せて、より正確な聴力を把握していく方向性を確認しました。

## もっと知りたい人はこちら

1. 沖津卓二（2010）重複障害児の聴覚医学的問題、Audiology Japan、53、664-676.
2. 菅原廣一（1985）COR Audiometry による重複障害児の聴力閾値検査について、Audiology Japan、28、156-167.
3. 菅原廣一・我妻敏博・高橋信雄（1981）重複障害児の聴性行動反応の測定、国立特殊教育総合研究所研究紀要、8、17-26.
4. 田中美郷・針谷しげ子（1998）聴覚障害を有する重度脳障害児の難聴診断と対策、音声言語医学、39、428-441.
5. 立石恒雄・木場由紀子（編）（2004）言語聴覚士のための子どもの聴覚障害 訓練、ガイドダンス、医学書院.

## I. 実態把握

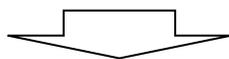
# 7. 諸感覚の活用に関するアセスメント

### こんなことはありませんか？

ショウさんは、今、小学3年生です。

表出に用いることができる身体部位が限られており、表情等からも、なかなかショウさんの気持ちを読み取ることができません。

担任の先生は、絵本を見せたり、音楽を聴かせたりしていますが、なかなかショウさんからの応答を得ることができず、日常どのような支援や学習を行えばいいのかわからず悩んでいます。



### ここがポイント！

視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚等の感覚の活用状況について、子どもがどのように様々な刺激を受けとめているかを探りましょう。

また、子どもが活用することができる感覚や、子どもにとって心地よい感覚を支援や学習に取り入れましょう。

## このように考えてみましょう

私たちは毎日、様々な感覚を通して周囲の情報を受け取っています。朝目覚めて、立ち上がって歩き、顔を洗い、ご飯を食べる、という動作の中で、私たちは自分の周りの環境とかわかることによって、様々な感覚を通して周りの状況に関する情報を得ています。子どもにとって、探索や遊びは大事な学習や発達の際はです。子どもは周りの環境とかがわりあいながら得られる視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚、固有覚（手足の位置や体の動きを知る感覚）、前庭覚（身体の傾きや動き、運動の速さの変化などを知る感覚）等、様々な感覚刺激を通して、自分を取り巻く世界について学び、それが認知や運動発達の源となります。

子どもに障害がある場合、特に活用できる感覚が限られていたり、自ら探索することが難しかったりする子どもは、残念ながら上記のような学習の機会が制限されてしまいます。教育においては、子どもが様々な感覚を用いながら周囲の環境とかわかることへの、丁寧な支援が大切になってきます。

まず、子ども自身が活用することができる感覚や子どもにとって心地よい感覚を探り、それを手がかりにしてかかわってみましょう。

具体的には、日常生活の様々な場面、あるいは授業等の設定された場面で、見ること、聞くこと、触ること、匂いを嗅ぐこと、味わうこと等の様々な感覚をどのように受けとめ、どのような応答を見せてくれるかを丁寧に観察してみましょう。また、子どもの感覚過敏の状況や、感覚をつかった探索の仕方についても情報を得ましょう。重い障害のある子どもが感覚を受け入れ、何らかの応答をするまでにはたっぷりの時間を必要とすることに留意しましょう。

得られた情報は毎日の支援や学習場面に取り入れることができます。

## 具体的な実践に向けて 使えるツール ポイント

### 1. 子どもが好きな感覚刺激を把握しましょう

例) 視覚 (色、光、大きさ、距離、位置)、聴覚 (大きさ、高さ、イントネーション、リズム)、触覚 (固さ、強さ、リズム)、味覚 (甘み、苦み、辛み、熱冷)、嗅覚 (食物、人、場所) 等  
子どもの好きな感覚や苦手な感覚を生活場面や設定場面で観察しましょう。

触覚を例にとると、私たちが触れるものには、サラサラしているもの、フワフワしているもの、ツルツルしているものなど様々な触感があります。また、硬いものでもプラスチックや木材など色々な素材があふれています。嗅覚は脳にダイレクトに伝わる感覚です。「おばあちゃんの家の匂い」など子どもの好きな匂いを探ってみましょう。

### 2. 感覚刺激への子どもの反応は様々です

子どもの快・不快表現は表情だけに表れる訳ではありません。ちょっとした目や指先の動き、呼吸の変化などに表れる場合も多いです。考えるような表情になる子どももいます。担当者は子どものわずかな表現をも見逃さないように子どもの全身が見える位置取りでかかわるなどの工夫も必要です。

### 3. 子どもが心地よいと感じる感覚の種類と強さ (閾値) を把握しましょう

心地よいと感じる感覚の強さは子どもによって異なります。障害の重い子どもの場合、感覚が過敏で突然入力されてくると驚く場合もあります。まずは強すぎず、ソフトな感覚刺激を提示してみましょう。

### 4. 得られた情報を毎日の支援や学習場面で活用するには・・・

好きなものに触れる時は、必ず見せたり (視覚)、ことばかけをしたり (聴覚)、ときには匂わせてみたり (嗅覚) と感覚を組み合わせるほうが子どもにとって何が来るのかわかりや

すくなり、触る前の心の準備ができます。子どもの好きな感覚を毎日の生活に取り入れることで、「次はこれが来ます」という予告にわくわく期待する様子が見られるようになるかもしれません。わかって安心できる感触遊びなどの場面では、自ら指を動かすなどして探る様子が見られるようになるかもしれません。

## これを実践してみたら・・・

ある日ショウさんがビーズクッションに頬を近づけようとしているところから、ビーズクッションの感触が好きであることを同じクラスの先生と確認することができました。そこで、食後の休憩時には、必ずビーズクッションにもたれて過ごせるような時間を作るようにしました。また、ショウさんが日常過ごすスペースの近くに、ビーズクッションのコーナーを作ることにしました。そこで、ビーズクッションと同じ素材のお手玉を作り、ビーズクッションのコーナーに行く前に予告としてお手玉を触らせることにしました。すると、お手玉を触ったとき、ショウさんの眼球や口角がわずかに動いていることに先生は気づきました。ショウさんは「次に起こること」への見通しが持てるようになったのです。

## もっと知りたい人はこちら

1. 日本感覚統合学会編著「JMAP（S-JMAP）日本版ミラー幼児発達スクリーニング検査」
2. 佐藤和美著(2008)「たのしくあそんで感覚統合—手作りのあそび100」、かもがわ出版
3. クリスタ・マーテンス著、姉崎 弘監訳(2009)「スヌーズレンの基礎理論と実際—心を癒す多重感覚環境の世界」、大学教育出版.
4. 小林芳文著「MEPAⅡ 乳幼児と障害児の感覚運動発達アセスメント」、日本文化科学社
5. Fowler, S.(2007). Sensory stimulation: Sensory-focused activities for people with physical and multiple disabilities. Jessica Kingsley Publishers.

## I. 実態把握

# 8. 環境面のアセスメント

### こんなことはありませんか？

エミリさんは小学3年生になりました。授業で様々な活動が楽しめるようになり、例えば、「帽子をかぶってさんぽの歌を歌うとお散歩」など、これから何が起こるか、予測が立つことも増えてきました。

でも、見えにくさのあるエミリさんは自分から教室にあるおもちゃに目を向けたり、手を伸ばしたりすることはめったになく、先生が何かしてくれるのを待っていることが多いです。

先生は、エミリさんがもっと自分から意思表示したり行動したりしてほしい、と思っていますが、そのためにどんな工夫があるでしょうか。



### ここがポイント！

教室や校内でよく使う場所が、その子どもにとってわかりやすい環境設定（人、物理的空間、もの）になっているかどうか、生活や学習の環境を見直してみましよう。

## このように考えてみましょう

「理解する力はあるはずなのに、子どもからの自発的な行動があまりない。」という時、子どもが生活・学習している環境を、その子の視点で見直してみましょう。子どもが自分から行動を起こしづらい理由は、ひと、もの、場所などのわかりにくさにあるかもしれません。

### ①子どもの立場になって普段の生活・学習環境をどのように把握しているかを考えましょう

子どもの周りには、子どもにとって大事なもの、そうでないものを含めて、たくさんものがあります。子どもはどのように自分にとって大事なものを見つけているのでしょうか。大人は、様々な都合で、活動に使うものを片づけたり置き場所を変えたりしています。しかし、周囲の環境を把握しにくい子どもにとっては、目の前にあるものがいつの間にか世界から消えたり、また登場したり、という経験の繰り返しかもしれません。かかわる大人が子どもへの予告なしにクルクル変わることはありませんか。子どもの立場になって考えてみた時、普段の生活・学習環境は予測できない、安定することのない世界になっていないのでしょうか。

### ②子どもが主体的に行動できるように、なに？どこ？だれ？がわかる工夫をしましょう

私たち大人でも、知らない街で何が起こるかかわからず言葉の通じない人を頼りにせざるを得ない状況では、主体的になるのは難しいことです。多くの子どもは、よく知っている人と、いつもの環境で、なじみの活動を行う時に、主体性を発揮します。いつも遊んでいるおもちゃの方向に目を向けたり、次にくすぐられることを予測して笑ったりします。なに？どこ？だれ？がわかる安定した世界で、自信をもって主体性を発揮できます。

### ③子どもの見え方、聞こえ方、用いている感覚など実態把握の情報を生かしましょう

例えば、見えにくさのある子どもにとっては柵や遊具などの配置を固定したり、見えにくさを軽減して大事なものを見えやすくしたり、触って確認できる場所の手がかりを使う等の配慮が必要です。「その子どもにとってわかる」という視点で生活・学習環境を組み立てましょう。

## 具体的な実践に向けて 使えるツール ポイント

子どもが生活・学習する環境は、何よりもまず安全面・衛生面の配慮がなされ、子どもが必要なものにアクセスできる環境であることが大事です。加えて、その子にとって「なに？」「どこ？」「だれ？」がわかる環境であるかを見直しましょう。参考となる視点を挙げます。

### ○その子にとって大事なものを自分で見つけやすい工夫がなされていますか？

好きなおもちゃ、お気に入りの本、自分のカバン等、子どもにとって大事なものを、子ども自身が見つけやすい工夫がなされていますか。(マイブームのおもちゃをいつも同じ場所に置くこと、連絡帳に子どもが見えやすい蛍光紙を貼ること、等)

### ○その子にとってわかるスケジュールが用意されていますか？

朝の会の時、集団で一日のスケジュールを確認する時に、写真カードを使っている場面をよく見かけます。写真カードで内容が伝わりにくい子どものために、その子どもにわかる形でスケジュールが用意されていますか。(触ってわかる手がかり、活動の歌、等)

### ○その子にとって大事な人がわかる工夫がありますか？

見えにくさ、きこえにくさのある子どもには、そばにいる人が誰なのかがわかりにくい場合があります。子どもがわかる方法で側にいるのが誰なのかを伝えているでしょうか。(同じ色の服を着る、同じ香水をつける、ネームサインを触らせる、テーマソングを歌う、等)

### ○その子にとって大事な場所がわかる工夫がありますか？

車いすで移動する時、子どもがどこに何をしに行くのかを理解する手がかりがありますか。今どこにいるのかがわかる工夫がありますか。(のれんなど教室の入り口の手がかり、等)

### ○その子が活動しやすいよう環境の感覚刺激は調整されていますか？

子どもがわかって活動できる音、光、温度などの環境における刺激は適切でしょうか。(カーテン・間接照明などまぶしさを軽減する配慮、きかせたい音がきこえる音環境の配慮、等)

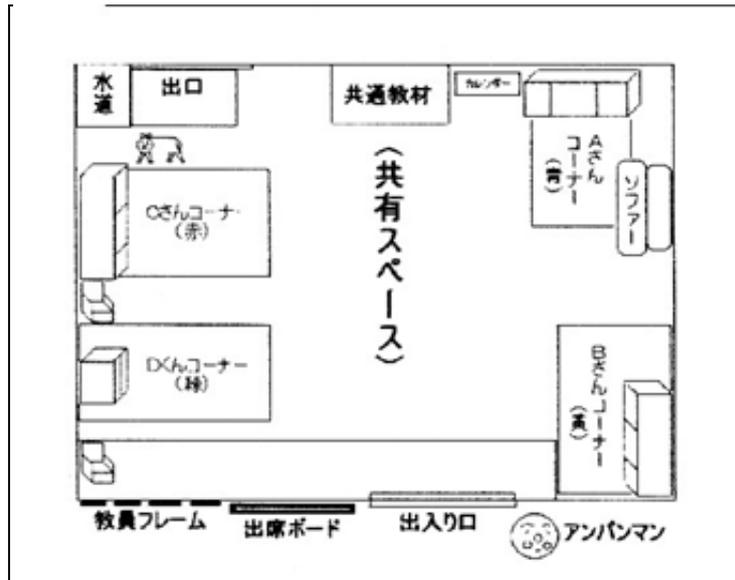


図 一人一人のコーナーを用意した教室環境の様子

### これを実践してみたら・・・

先生は教室環境を見直し、子ども一人一人に休憩したり、スケジュールを確認したり、自分の大事なものを置いたりするコーナーを作りました。見えにくさのあるエミリさんですが、見え方についてのアセスメントの結果、赤い色は比較的に見えやすいことがわかりました。エミリさんのコーナーのマットを赤い色にすると、エミリさんは自分のコーナーに行きたい時、そちらに目を向けて教えてくれるようになりました。お気に入りのコーナーで横になると安心したような表情になり、好きなアンパンマンのおもちゃに手を伸ばす様子が見られるようになりました。また、赤い服を着た担当の先生を目で追ったり、来てほしい時に赤い服を着た先生を見たりする等、エミリさんが意思を表しそれが先生に伝わることが増えてきました。コーナーにはエミリさんのスケジュールもあります。帽子＝お散歩（外）、給食袋＝給食（給食室）、小さいボール＝からだ遊び（体育館）など、どこに何をしに行くのか、がわかる手も増えてきました。

## もっと知りたい人はこちら

1. 国立特別支援教育総合研究所（2009）. 重複障害児のアセスメント研究：視覚を通じた環境の把握とコミュニケーションに関する初期的な力を評価するツールの改良. 平成 20 年度 専門研究 A 研究成果報告書.
2. 齊藤由美子（2010）. 障害の重い子どもの自己決定の力を育むために. 障害の重い子どもの授業づくり Part 3 :子どもが活動する「子ども主体」の授業を目指して（飯野順子編著）、pp18-37. ジアース教育新社.
3. 中澤恵江（2000）. 障害の重い子どものコミュニケーションと環境をめぐって. 肢体不自由教育、146、20－29.
4. Siegel-Causey、E.、 & Bashinski、S.(1997). Enhancing initial communication and responsiveness of learners with multiple disabilities: a tri focus framework for partners. Focus on Autism and Other Developmental Disabilities、 12、 105-120.

## I. 実態把握

# 9. 子どもの興味関心のアセスメント

### こんなことはありませんか？

エミリさんは、肢体不自由特別支援学校の小学部4年生です。

人とかかわることが大好きで、慣れ親しんだ人には表情や声で気持ちをアピールしますが、新しい人には上手に表情や声を出すことができません。

4月、新担任の先生は、エミリさんの表情や声あまり出ないので、何に興味関心をもっているか分かりにくく、どのような学習内容をすればよいか悩んでいます。

個別の教育計画を立てる時、少しでもエミリさんの学習に対する実態を知りたいと思っています。



### ここがポイント！

子どもの興味関心を学校生活だけで把握することは容易ではありません。保護者への聞き取りの方法を工夫することで、子どもの興味関心（好きなものや馴染みのある活動など）のヒントを知り、子どもにとって主体的な学習や活動へとつなげていきましょう。

## このように考えてみましょう

興味関心のある事柄とは、子どもが主体的に学んでいく状況をつくるための材料になります。万遍なく様々な事柄で取り組み始めるよりも、興味関心のある事柄をきっかけとして活用することで、主体的に学ぶ意欲が高まります。しかし、障害が重く、重複している子ども達は身体の動きの制限などにより、学校生活だけで興味関心のあることを探っていくには難しいことがあります。そこで、計画立案にあたって、保護者に事前にアンケートを行い、子どもが好きなものや馴染みのある活動等のヒントを集めてみてはどうでしょうか。保護者との連携で得たヒントをもとに実態把握を効率的に進めることができるでしょう。

また、保護者が子どもの好きなものが分からないという場合もあると思います。その時は、今までの馴染みのある活動の中から、一緒に興味関心のヒントを見つけていく等の視点も大事です。

### 1. 教員にとっての利点

新年度の最初に、これらのアンケートで興味関心にかかわる事柄を知り、活動計画のヒントとして生かすことができます。質問項目はシンプルですが、項目ごとに尋ねることで、より効率的に情報を得ることができます。また、質問の回答をもとに保護者と話し合い、気になる内容をさらに深く聞くことができ、保護者と連携した課題検討がスムーズにできます。さらに、担任と子どもが互いに緊張しがちな新年度に、子どもが好きだったり慣れていたりする活動から始められることで、子どもが安心して活動に取り組むこともできるでしょう。

### 2. 保護者にとっての利点

どこに何を書けば良いか最初は戸惑いますが、書き出してみると、子どもの姿を改めて考えることができます。また、見過ごしていたことも気づくかもしれません。さらに、口頭での情報交換では言いそびれてしまうこともありますが、アンケートを落ち着いて書くことでそのような心配が少なくなります。そして、新担任にも、よりスムーズに子どもの興味関心

などの情報について知ってもらうことができます。

### **3. 両者にとっての利点**

このアンケートを用いた検討を通して、子どもにかかわる人が、子どもが何に興味関心があるのかを共有し、互いに子ども理解を深めることができます。

## 具体的な実践に向けて 使えるツール ポイント

興味関心にかかわるアンケートを、例えば、以下のように保護者に書いてもらいましょう。保護者にとって、気軽により多く書くことができるように、かつ、教員にとって、効率的に指導に生かせることができるような情報が集められるように、質問項目を工夫しました。

保護者が書きづらそうにしている場合は、アンケートをもとにして、聞き取りながら記入し、話を進めていくとよいでしょう。また、保護者と相談しながら、学校での教育活動を通して「子どもが興味関心のあるものをつくっていく・増やしていく」という視点も大切でしょう。

このアンケートを読む時にいくつかのポイントがあります。①③④⑤では、好きなもの／人／場所を、⑧は理解していると感じるエピソードを聞いていて、保護者の主観性が高い内容です。保護者に答えてもらいやすいように、このような質問にしていますが、これらの質問はこの後の確かめが必要です。本当に好きなのか、好きならばどのように好きなのか等を一步深めて読みとることが、主体的な学習につながります。

②⑥⑦は、客観性がより高いと考えられる内容で、比較的すぐに活用できるでしょう。これらの中から、子どもが主体的に活動できる材料の『ヒント』を探すという視点を大事にしましょう。

また、学校でも複数の教師で分析を行い、保護者記入のものと合わせて考えることで、子どもの状況が相互により分かってくると考えられます。



## 《 エミリ 》さんへ インタビューです

たくさん知りたいなあ♪

25年7月15日

① 好きな遊びや状況は何ですか？  
(どうして好きだと思いますか？)

- ・ 本
- ・ 水遊び  
よく声が出ている

② よく見たり聞いたりすることは  
何ですか？

- ・ DVD (ゴールデンボンバー、嵐 AKB48)
- ・ アニメ  
(ちびまるこちゃん、サザエさん)
- ・ テレビ番組 (グルメやバラエティ)

③ 落ち着いたり安心したりすること  
(もの・活動)は何ですか？  
(そのときはどのような様子ですか？)

- ・ 音楽を見たり聞いたりすること
- ・ 散歩  
ほっとしているようです

④ 好きな場所や落ち着く場所は  
どこですか？  
(そのときはどのような様子ですか？)

- ・ 祖父母の家
- ・ 公園
- ・ スーパー

⑤ 好きな人や落ち着く人は誰ですか？  
(その人が近づいてきたことを  
何で判断していると思いますか？)

- ・ 兄弟 足音
- ・ 祖母 めがね
- ・ デイサービスの人 車の音

⑥ 苦手なことやきらいなこと  
(飲み物・もの・活動・場所等)は  
ありますか？  
(どうしてそう思いますか？)

- ・ 病院 (歯科受診)
- ・ 自分の嫌いなものを見せたら嫌な顔をする。

⑦ 慣れ親しんでいる  
“おなじみ”の活動はありますか？  
(それは、いつ行っていますか？)

- ・ 散歩 土曜日

⑧ 状況がよく分かっているなあ  
感じた場面やエピソードはありますか？

- ・ 出かけていて多くの人がいって順番を待っているとき、不機嫌にならずに待っている。  
(買い物、病院)
- ・ 兄が母に叱られているとき、見て見ぬふりをする (エミリにとって泣いたり騒いだりしたら、まずいと思っているのかもしれない。)

これって、どこに書くのかなあ？という事柄もあると思います。重なることもあると思います。場所や重なることは気にしないで、どんどん書いてみてください！( )の中の質問は、詳しく知りたいポイントです♪書けたら書いてください。どれもが、アイデアの宝です☆



## これを実践してみたら・・・

新担任の先生は、質問項目②や③をヒントに、DVDを見る場面でコミュニケーションの学習を設定することにしました。よく見たり聞いたりしていることを取り入れることで、より子どもが主体的にコミュニケーションをしようと意欲をもつことができると考えたからです。実際、好みの動画を変えてほしい時に、相手のそばまで行くことで、その気持ちを伝えるという目標を立てることができました。

アンケートの情報は学習環境の設定に役立ちました。DVDの種類や楽しんでいる時の子どもの情報が活用できたということです。また、意欲が高まる学習活動を設定できたことで、子ども自らの身体の動きが引き出され、拒否や要求が分かりやすくなり、DVDのなかでもどのような場面が好きかなど、更なる実態把握もできました。アンケートによりヒントを得て活動が計画できたことで、子どもの意欲を高める実践につながり、より充実した学習活動になったと考えられます。

## もっと知りたい人はこちら

1. 久蔵幸生(2013).指導に生かしたい「好み」のアセスメント. 特別支援教育4.